



満蒙開拓移民義勇軍

中訓練生だった佐藤猛さんの体験

遠山 武

満州の楊木ようぼくという所で、満蒙開拓移民義勇隊（現地では義勇隊、内地では義勇軍と称した）訓練生として、一年半ほど生活し、敗戦後、命からがら日本に帰還した佐藤猛（新潟市在住）さんのお話しを昨年から今年にかけて、何回か訪問し聞きました。佐藤さんの許可を得てお伝えします。

* *
十六歳で満州へ渡る

私（佐藤）が満州へ渡ったのは、昭和十九年（一九四四）五月、十六歳のときでした。満蒙開拓移民東滿総省林口県満鉄楊木義勇隊ようぼく訓練生二百五十名（九割は十四〜十五歳、残りの一割が十六〜十七歳）の一人として、沢山の父兄に見送られて、日本海には敵の潜水

艦がいるらしいので、静かに新潟港を出港しました。

当時、日本は「国策」として、「我等は若き義勇軍、祖国のためぞ歟取り万里涯てなき野に立たん」「自由の天地我を待つ、生きて帰らぬ命ぞと誓いて固き大使命」などの歌の文句で、少年の志を揺さぶり続けたのです。私は次男でしたので、満州へ渡って十町歩の農場主になる夢を描いていました。高等小学校宮浦校の受け持ちの先生である宇佐美先生からも「満州だ、満州へ」とよく勧められました。それが侵略戦争の一端であるとは、夢にも考えていませんでした。

* *
三十二万人が満州へ渡る

開拓の事業は、当時の国策により昭和七年日満船航路開設の年、武装移民団として始まりました。新潟市でも昭和十年日満定期航路が開設され、日の丸の旗で湧き返ったものです。以来、昭和二十年の終戦まで、開拓民・青少年義勇軍あわせて約三十二万人が満州へと海を渡り開拓事業に参加しました。

にいがた

北から南から



楊木は、北海道の北端・稚内と同緯度

新潟港を出た船は朝鮮に入港、そこから列

車（満鉄）で満州の楊木という所に到着しま

した。楊木は北海道の北端・稚内とほぼ同じ

程度の北で、百二十km（*11）先はソ連との

国境線です。今の普通の市販の地図では、楊

木という地名は普通、掲載されていませんが、

林口という地名が載っています。楊木は林口

まで六kmほどの所です。遼東半島のほぼ先端

の大連から鉄道で千百kmほどの所です。酷寒

地なので、大豆の脱穀場で、キジが群れて豆

を食べていましたが、食べ過ぎて枯れ草の陰

で凍死するキジもありました。稲作はどうにか

できましたが、反当たりの収量は、内地の二

分の一もない所でした。そこで約一年半、主

に豆とジャガイモ栽培の農作業と冬期間は軍

事訓練をしていました。軍事訓練は、六kmほ

ど離れた林口から関東軍の山砲部隊幹部が五

名来て行いました。日本は一方で民族の指導

者だと「五族協和」を唱え、他方では「軍事

訓練」を行う国の方針の誤りには気づかず踊

らされていたのでした。楊木は日本から私た

ちより先に渡った開拓民により、かなり開墾
は進んでいて、私たちは開墾はほとんどやら
ずにすみました。

訓練生の半数撫順炭鉱へ

楊木でほぼ一年ほど生活した頃、つまり昭
和二十年の春、訓練生のほぼ半数の百二十名
が「米より石炭を」という国の方針で、三〇
〇kmほど離れた撫順炭鉱へ配置換えさせられ
ました。あとで分かったことですが、この人
たちの中の二十五名は敗戦の混乱の中、病死・
凍死・餓死で、無念の思いを残して非業の死
をとげました。

軍隊は真つ先に逃避行

昭和二十年八月九日、私たちの宿舍から見
える楊木駅では南へ向う無蓋の列車が関東軍
の兵隊を沢山乗せて（後で知ったことですが、
関東軍は、民間人や開拓団にかまわず、軍隊優先
の列車で一番先に逃避行をおこなっていたので
した）頻繁に通るのが見え、ソ連の飛行機らし
い爆音も聞こえ、「ロシアと戦争状態に入った



との知らせも入り、ただならぬ状況になりました。後日わかったことですが、このときすでに関東軍による国境警備は皆無になっていたのです。十八歳以上の青年は、敵に応戦のためか、私たちと別行動で先に楊木を出ました。

楊木からの脱出

日本の軍隊・関東軍が、開拓民を置き去りにして、先に安全地帯に移動している中、私は十七歳で五十二名の訓練生の隊長として、「お前を頼りにしている隊員が大勢いる」と上司から言われ、隊員の安全を第一としながら、楊木から脱出し、二〇〇km程離れた安全地帯と思われる所をめざして移動を始めました。途中、ソ連戦車の銃弾の雨をくぐり抜けたり、敵の待ち伏せ攻撃の中を負傷しながら逃げ廻ったり、腰までぬかる泥沼を真っ暗闇中に逃げ回ったり、別の日本の開拓団の子どもが、親に捨てられたらしく泣き叫ぶ声を聞きながら逃げ回ったり、銃弾による負傷で虫の息の友を必死で運んだりしながらの地獄のような修羅場をくぐりぬけ、やっと安全な所

までたどりつきました。しかし、十一名が戦死、戦争とは親と子の愛を引き裂く悪魔です。

機銃掃射で負傷した虫の息の友二人を運ぶ苦しさは、想像を絶するものでした。生きて帰れるとは思っていませんでした。戦争は絶対反対です。沢山の開拓民、義勇隊の朋友が大陸の土と化しました。友よ安らかに眠りたまえ。隣人と仲良く隣国と仲良く、平和の尊さが身に沁みる昨今です。

青春は 狼の声に 朋の顔

晩秋の月に 何をか語らん

満州で過ごした青春時代には、本当の狼の声も聞いたし、国策による敵しい狼のような声があったが、折り目正しく、やさしいしい朋友もいた。八十歳となった今、内地での晩秋の月を見ると走馬灯のように想いがめぐり感慨無量だ。

(とおやまたけし・新潟市)